

## 第22回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムアンケート結果

日時：2024年10月12日（土）10:00～16:30

場所：中央大学茗荷谷キャンパス特大教室&オンライン開催

内容：ポスター参照（別添）

参加者：現地参加 83人、オンライン参加 89人、合計172人

アンケート回答者数：62人

### 1) 属性

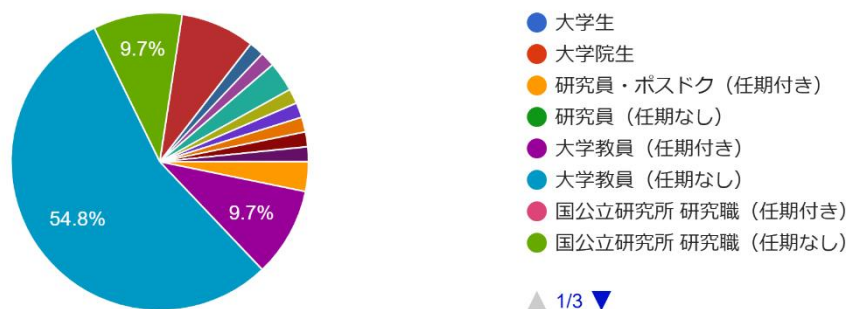
回答者の身分は、大学教員（任期なし）が最も多く、54.8%であった。ついで国立研究所研究職（任期なし）と大学教員（任期付き）が共に9.7%、民間企業8.1%、研究員・ポスドク（任期付き）と非雇用・退職・無職が3.2%であった。その他、大学・高専職員、団体職員、自営業、嘱託、大学アドバイザー、大学招聘教員、名誉教授からの回答があった。

年齢は50代が最も多く32.3%、ついで40代が30.6%、60代が21%、30代が11.3%、70歳以上が4.3%で、20代の回答者はいなかった。

性別は女性が64.5%、男性35.5%で、その他・答えないは0人であった。

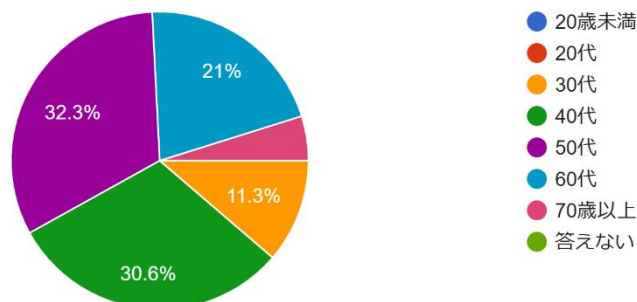
#### あなたについて

62件の回答



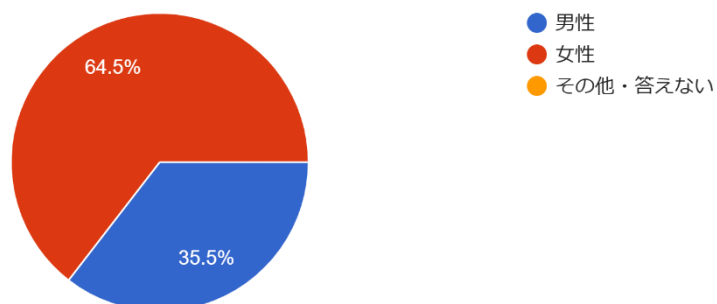
#### 年齢

62件の回答



## 性別

62 件の回答

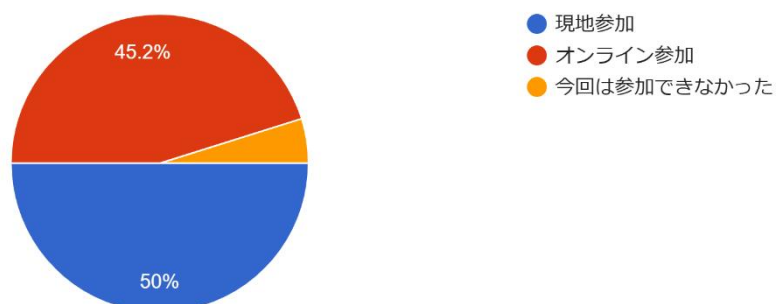


## 2) 参加形態

現地中央大学茗荷谷キャンパス（現地）での参加者 48%，オンライン参加者 52%であったが、アンケートの回答者の割合は逆転し、現地 50%、オンライン 46.2%であった。なお、今回申し込んだものの不参加となった人からの回答(4.8%)も掲載している。

### どのように参加されましたか

62 件の回答

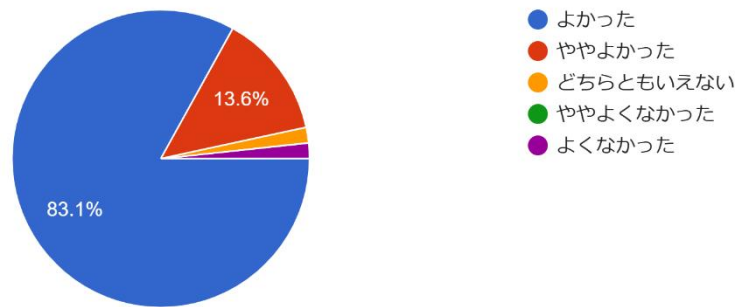


## 3) シンポジウム全体について

「よかったが」が 83.1%「ややよかった」は 13.6%、両者をあわせると 96.7%となり、良い評価であった。「どちらともいえない」「よくなかった」との回答はそれぞれ 1 人(1.7%)であった。

## シンポジウム全体について

59件の回答



### 4) 最も関心の高かった内容

約半数近い参加者が寺町先生の講演が最も関心が高かったといい、それに続き午前 of 永合先生の講演、パネル討論、朝井さんの講演と続いた。

### 5) ポスター発表について

現地に参加した人にポスター発表についての意見を募り、20名から回答があった。主な意見は以下の通り。

- 多くの学協会の取組み、女性比率の違いなど、多くを知り、交流することができ、大変有意義な会でした。
- 学会によって女性比率がだいぶ違うことが知れました。ポスターの交流時間がもう少し多いとよい気がします。
- 他業種の方と意見交換ができて、非常に充実していました。
- セッションの時間、枚数ともに充実を望みます。
- 会場に来てくれる人が少ないことが気になりました。お昼休みではない時間帯にも発表時間があるとよいのではと思います。
- 説明義務時間があると良いかもしれません。
- お昼時間と被っているのが残念だった。
- 各学長会のようにすを知ることができ良いと思いますが、負担も大きいので形式については今後、もう少し検討をしても良いのではないかと思います。
- ポスターのみならず資料の配布もあり情報としては多く良かった
- 学協会のポスターも良かったですが、大学のポスターが興味深く参考になりましたので、今後もっと大学のポスターが増えると良いかと思いました。

### 6) 資料集について

13件のコメントが寄せられた。主な意見は以下の通り。

- とても充実したよい資料だと思います。勉強させて頂きます 少し気になったのが、男女共同の連絡会に加盟されている学会は、女性比率が高めの学会のようにも感じられます。例えば、女性が確実に少ないと思われる、機械や電気系の学会などに参加してもらえると、もっと充実した討議ができそうです
- 資料集の内容が充実していて、とても助かります。

- 各学会の活動報告は、情報共有として有効と思います（特に、これから取組みをはじめる学会にとって）。
- 現地での講演、パネル討論ももちろん興味深いですが、文字で残る情報提供をしていただけることは貴重と思う。様々な団体の取組みを知ることができ、当方でも今後の参考にしたい。

## 7) 感想・意見など

38件のコメントが寄せられた。主な意見は以下の通り。

- 地域格差と女子高校・大学生の目線での経験との整合が浮き彫りになり、意義深いパネルディスカッションであったように思います。あらゆる社会動向が、（ごくわずかな一部の地域や大学組織を除いての）学術やキャリアに対して負の連鎖を導いている政策の結果はいよいよ隠しようがなくなってきたのだと感じました。
- たしか午前中に話をされた永合氏も言うておられましたが、すでにある程度理系に興味をもっている人にしかアプローチができていない、女子中高生にもっと理系を選んでもらうためには、もっと幅広い層にアプローチをしないといけないのだが、それができていない、ということが問題だと思います。理系に進んだ場合の女性の先（就職）が見えないので女性が理系に行かないというようなことを複数の方が言うてらっしゃったように記憶していますが、文系とくに文学部に進む女性（男性も）の就職先の方がはるかに見えないと私は思います。つまりそれって単なる偏見ですよ。もう少し鋭く追求してもよいのかなと思いました。
- 永合先生のご発表の中に、高等教育を受けるのに要した費用と、その後の生涯賃金へのリターン率のOECDのデータがあり、各国に比べ日本の女性のリターン率があまりに低いことに驚きました。この異様な数字が意味するところについてこれまで何らかの議論がなされたのか知りたく思いました。生涯賃金の低さは、保護者が女子に高等教育を受けさせる意欲を減じる原因にもなりますし、その後の女性の低年金・貧困化にもつながります。14時以降Webから退出しましたので、その後何らかの議論がなされたのかわかりませんが、とにかく驚きのデータでした。
- 20年ほど、夏学に参加してきたので、ぜひ参加させていただきたかったのですが、入試などの大学行事と重なり参加できませんでした。
- 高校訪問をしても女子学生の理系選択に壁の高さを感じていたが、今回のシンポジウムでその背景（そしてその根の深さ）がよく分かりました。
- とても良い企画でした。特に、夏学の経験を、学生の視点で聴けたのが新鮮でした。学生で夏学に参加し、スタッフとして関わり、理系に進むという、理想的な姿ですね。ポスターの部屋でポスターとともに懇親会の企画があれば、なお、よかったかもしれません。
- 理系分野に進学する女子が少ない現実と、それを改善させようと尽力されている先生方の様子がよくわかってとても素晴らしいシンポジウムでした。ありがとうございました。
- 昨今大学の女子枠新設についてのニュースが議論になることが多いですが、今回のシンポジウムは、その必要性に対する一つのアンサーになっていたと思います。国際学力テストの理系科目にここまではっきりと男女差がないのはとても驚きました。また、地方出身の佐藤さんと朝井さんの経験談は、都会の進学校出身者には想像も及ばないことが多く、お話を伺えてとてもよかったです。緊張されたご様子から登壇にはとても勇気がいったことが伝わってきましたが、お二人の勇気に感謝いたします。
- 夏学のチラシが公立の共学校に配れないのは衝撃であった。
- 内容がとてもよかったと思います。
- ご準備された幹事団体の方々は大変だったことと思い、感謝申し上げます。会場となった新しい中央大学の校舎も駅に近く、良い環境で参加することができました。大規模アンケートについても、国の施策の基礎データとなるほどのものとして重みを感じます。“学協会”の集まりのせい、アカデミック寄りと感じます。理工系の学校を出た後に働く場として過ごす人たちは、研究者より多いはずなので、研究者も大事ですが、多数派の技術者のこともとあげることが大事ではないかと思えます。
- 女子の理系選択を阻む要因が、小学校以前からの学校の環境、家庭や友達やまわりの人の意識、教員養成する教育大学自体が文系、理系を教える女性教員数が少ないなど、日本では中

高生以前の小さい頃からの環境要因が多いことを改めて知りました。これは、各教員や各学校で何とかできるレベルの問題ではなく、国自体が学校環境や教員養成のしくみを変える必要があると思いました。自分は物理専攻でしたが、親もずっと進路を応援してくれ、高校も理系クラスに女子がある程度いたため（1/3 くらい）、「女子が理系にいくなんて」と成長の過程で考えることなく進路を選択できたのは、少数派だったのかもしれないと気づきました。ただ、大学では女性学生が 3%しかおらず、現在のような男女共同参画の取り組みがなかったため、女性であることで過ごし辛かったり、疎外感を感じたり、就職や職場内での立ち位置など不利になることを経験してきました。それを思い返すと、リケジョを増やす現在の取り組みは、まだ問題点はたくさんあるかもしれませんが、確実に進展していると感じます。

- 社会教育学の先生の講演は現状を分かりやすく述べてくださって面白かったです。地方によって女子学生の状況が 30 年前とそれほど変わっていない事実を知ることができました。共感することも大切だし、そのために何ができるかを考えることも同時に行いたいと思いました。
- 夏学は初めて内容を知って興味が持てました。単科大学で女子中高生向けのイベントを行うには教職員の負担も大きいと感じます。いわゆる中高の理系には医歯薬看護学への道も含まれると思いますので、関東近隣でも医歯薬看護学系の夏学のようなイベントを企画できる大学・学会連携コンソーシアムのようなものが出来れば良いと感じました。
- 子供の頃から周囲のアンコンシャスバイアスにより進路が狭められていることや、問題を解く際にも影響すること、海外との比較など、勉強になりました。個人的には、研究員として働きながら女の子を育てる母親として、親（男女）の職業が子（男女）の進路選択に影響するのにも気になりました。また女性蔑視で有名な東大からは、官公庁や国の研究機関へ進む人が少なくなく、出世欲が強く上役になる人が少なくないため、日本社会へのバイアスの影響は無視できません。東大や京大の実情などを、データにまとめて大学教員から紹介いただけると、子供が中学校と高校の先の進路を選択する上での参考にもなるし、大学としての意識改革にもつながるのかと思いました。
- 現役大学院生や夏の学校の卒業生の声が聞けて、参考になった。社会教育学からの見方も、興味深かった。
- 夏学に参加した学生さんの声が聞けたことが良かったです。学協会アンケート結果の報告も興味深いものでした。
- 日本の女子高生の科学リテラシーが世界 1 位であるにもかかわらず、未だに女性の収入リターンが世界に較べて並外れて低いのは、嘆かわしい実態であり、日本の意識改革、社会のシステム改革が必要であると実感した。
- 活発な意見交換がとても素晴らしいと思いました
- 夏学には学会として継続して取り組んできたので、シンポジウムテーマとして取り上げて頂き、大変興味深く視聴できました。これまでの成果と今後の課題を把握でき、また、一個人、一学会としての非力を感じると共に、連絡会という大きなまとまりとして今後も取り組んで行く必要性を強く認識いたしました。
- パネルディスカッションで時間がなく質問できなかつたのですが、夏学の周知に関して、学術系 YouTuber などのインフルエンサーとのコラボレーションなどを検討されているか、聞いてみたかったです。特に地方で理系に興味を持っている女子中高生に対するアクセス方法として有効かもしれない、と思いました。
- 関西科学塾や夏学参加者のアンケートからも根深いジェンダーバイアスが日本にはあることを痛感しました。そこで、細越先生からの「大学の理系学部の男女比が半々になるまで活動継続」という強い思いを多くの関係者と共有をして、日本の男女共同参画意識を高め続けなければならないと感じました。
- それぞれの学協会の男女共同参画に関する取り組みを知る機会としてとても良い。対面形式を継続するべきだと思います。
- 9 月（セメスター開始前）の平日のほうが参加しやすいかもと思いました。（週末のシンポジウムは家庭があるとつらいです。）
- シンポジウムは連絡会主催なので、参加費は分担金に含めたらどうでしょう（資料集の活動報告はシンポジウムに参加しない学会も原則提出するとして）。
- ポスターをオンラインで聞けないのが残念でした。

## 8) 今後のシンポジウムのテーマについて

17件の回答が寄せられた。主な意見は下記の通り。

- 長いものに巻かれることで生き残る戦略、お金や権威に迎合して責任や創造性を放棄してでも生き残る戦略を採用して生きる女性（男性）の立場からの意見も聞ける機会があって良いように思います（男女の差は存在するか？どこにあるのか？上司にか・組織にか・社会にか・パートナーにか？）。生き残るために「研究をやめる」、「学会をやめる」、「やめるように仕向けられる」きっかけはなんなのか（人事異動や転勤など、企業や役所の価値観のこと）？何がそうした選択をさせるのか（ここでも地域差？）、どうあればより自由に前を向けるのか、思考や構造（評価・人事）や能力陶冶（育成プログラム）に潜む現実の課題を具体的に知る機会になるかな、という点での興味・提案です。（ただの個性の問題なのかもしれないので、適切なテーマか？ですが、多少気になることとして）。地域に対して学協会は何をすべきか、具体的にアクションすべきなのかもしれないと感じつつ、のことをございます。
- 女性参画について、男性は経済性を問うてくるケースが多いです。そのような事例を絡めて、もっと男性の気持ちを変えていくような企画があってもよいかもしれません。（男女平等とか公平性とかを嫌う男性が結構いる気がします）
- ハラスメントに関する各機関の対応と効果。ライフイベントと仕事の両立を充実させるための施策の実効性と問題点。
- 男性側や、年上の世代や若い世代など、見る角度を変えたときの男女共同参画の現状や意見を知りたいと思います。
- これまでに聞いてきた中で、実際のデータを用いた紹介、特に海外との比較は説得力があり、日本社会も変えていかないといけないという焦りを生むきっかけになると思います。引き続き、「無意識のバイアス」や「海外と日本の比較」を取り上げていただきたいです。
- 若手研究者・技術者のキャリア形成（ライフイベントとの両立、選択的夫婦別姓など）、女性研究者・技術者の（ノンアカデミック分野への）活躍の広がり

以上